

令和 3 年 5 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K22996

研究課題名（和文）中世期スーフィズム思想史理解への試み イラン・スーフィズムに着目して

研究課題名（英文）Preliminary research for comprehension of medieval sufism thought

研究代表者

井上 貴恵 (Inoue, Kie)

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：70845255

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は以下の3点を目的としていた。まず ルーズビハーンとイブン・アラビー思想の近似について存在論的観点から検討を加える。イラン・スーフィズムがイブン・アラビー学派へ与えた影響を明らかにすることで論を補強する。また研究目的、の遂行にあたり、教団の始祖とされたスーフィー聖者、教団の運営者、教団という三者の連関を思想面から検討する。

研究遂行の成果として、特にトルコのメウレヴィー教団における教団教義とスーフィズム思想との関わりの詳細を明らかにすることが出来た。今後他の教団の検討も加え、教団研究とスーフィズム思想研究をスーフィズム史として統合する端緒を得ることが可能であると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はスーフィズム教団教義とスーフィズム思想との関わりに着目することで、教団研究とスーフィズム思想研究をスーフィズム史として統合する際の布石的研究になると考える。これまで主に異なる分野において担われてきた教団研究とスーフィズム思想研究という両者の研究を架橋する試みとして今後、より総合的なイスラム理解に貢献し得る分野である。

研究成果の概要（英文）：The aims of this research is 1) The examination of thought of Ruzbihan al-Baqli and Ibn al-Arabi from the view point of ontology, 2) The examination of the influence of Iranian sufism on Ibn al-Arabi, 3) The examination of relationship of sufi order, sufi saints and the founder of the order.

As a consequence of this research, I pointed out about the relation of the principle and sufism thought of Mevlevi order. I would like to develop this research on other sufi orders and to connect the research of the sufism thought and sufi order.

研究分野：スーフィズム

キーワード：スーフィズム イスラム イラン 神秘主義

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の最終目標は、9世紀から12世紀頃にイランで発展したスーフィズム(イスラム神秘主義)思想と、13世紀以降主流となったスーフィズム思想潮流との間隙を埋めることで、9世紀から15世紀頃までのスーフィズム史を一連の思想史として捉えることである。

イランで発展したスーフィズム思想と、13世紀以降に主流となったスーフィズム思想とは、時代的、地理的な隔たりは少ないにもかかわらず、先行研究の影響を受けたことで思想的間隙が生じている。報告者は両思想の間隙を埋めるべく、両思想を代表する神秘家の思想を考察し、周辺の神秘家についても検討を加えることで、両思想の連関の可能性を提示したい。更に13世紀以降活況を呈したスーフィー教団という組織を思想面から考察する事で、現代まで継承されるスーフィズムの源泉としての中世期スーフィズム思想の役割を明らかに提示することを目指した。

報告者が専門とする「スーフィズム」は、戒律や規律の遵守を重んじる外面的なイスラムへの反発から生まれた、修行などを通じた内面的信仰の深化を図る思想運動を指す。とりわけイランではスーフィズム思想は独自の発展を見せ、神を求める修行者と神との関係を男女の恋愛関係に模し、愛や熱狂、酒など陶酔的な用語を使用して情熱的に謳いあげる作品が多く書かれた。当該分野の嚆矢である東洋学者コルバンは、1960年代にこうした陶酔的なトピックに着目し、この傾向をイラン独自の潮流と見なし「イラン的スーフィズム」と名付けたが、13世紀に入りスーフィズム史上最大の思想家イブン・アラビー(d. 1240)の登場により、イラン的スーフィズムはイブン・アラビーの哲学的傾向を帯びた思想に取って代わられる。イブン・アラビーの思想は、この世の存在物は遍く一なる神の顕現の結果であるとする神一元論的傾向を有するため、イラン的スーフィズムとは別個の体系と論じられるのが常であった。つまり、従来のスーフィズム史は、イラン的スーフィズムという陶酔的な思想の後、神秘哲学的傾向を有するイブン・アラビー思想が不意に立ち現れ、スーフィズム史を席卷していくという不自然な歴史認識の内に留まっており、両者の歴史的・思想史の間隙に無関心のままなのである。報告者はこの思想史の間隙を研究史上の問題点であるとみなし、本研究においてこの間隙を埋めるべく以下の3点を研究目的とした。

## 2. 研究の目的

本研究は以下の3点を目的とする。まず **ルーズビハーンとイブン・アラビー思想の連関を十全に指摘すべく、両思想の近似について存在論的観点から更に検討を加える。** またイブン・アラビー以降のイブン・アラビー学派の思想とルーズビハーン思想との連関に関しても視野に入れ、**イラン・スーフィズムがイブン・アラビー学派へ与えた影響を明らかに**することで論を補強する。また研究目的、の遂行にあたっては、「スーフィー教団」という視点が不可避であると報告者は考える。なぜなら、イブン・アラビー以降のスーフィズムは、従来通りの個々のスーフィーによる知的営為に加え、教団組織を基盤とした集团的かつ実践的スーフィズムが隆盛を誇るからである。スーフィー教団研究は、歴史学や人類学の方法論に基づいた研究が主であり、イブン・アラビー期に頂点を迎えた極度に抽象的な神と人との直接的交流の思想とは異なる研究分野として確立されている。しかしながら、教祖となる過去のスーフィーの思想は、教団の聖者の教えとして教団の運営者によって伝達され、

教団の方法論として取り込まれた。つまり、イラン・スーフィズムからイブン・アラビー思想へと継承された思想は、教団を通し現実世界に具現化された部分が存在するのである。よって **教団の始祖とされたスーフィー聖者、教団の運営者、教団という 3 者の連関を思想面から検討することで、教団研究とスーフィズム思想研究をスーフィズム史として統合する端緒を得ることが可能であると報告者は考える。**以上 3 点の研究目的の遂行を通し、スーフィズム思想研究を基盤に、教団化という社会現象も視野に入れた総合的スーフィズム研究に寄与することを目指した。

### 3．研究の方法

**研究目的 ルーズビハーンとイブン・アラビーの神 人関係論の検討**に関しては、従来の研究で検討した資料を援用しつつ、未検討の以下の資料、未刊行写本資料を可能な限り収集する予定であったが、コロナウイルスの影響で海外への渡航が叶わなかったため、入手可能な資料の講読を行った。 **イラン・スーフィズムとイブン・アラビー学派思想との連関**に関しては、研究内容と方法：ルーズビハーン以外の「イラン的」と目されたスーフィーのうち、イブン・アラビー思想との関わりに関し重要と考えられる文献を収集・検討した。**思想面から見た教団のスーフィズム**に関しては、ルーズビハーン教団、またイブン・アラビー学派のスーフィーが多く属したナクシュバンディー教団、イブン・アラビー学派とも多く交流を持ったメウレヴィー教団を対象とした。研究にあたってはコンヤ（トルコ）メウレヴィー教団図書館所蔵の資料及び実際現在も現地で活動するメウレヴィー教団関連施設なども研究対象としていたが、こちらも入手可能な文献を利用したの文献研究が中心となった。

### 4．研究成果

本研究の成果として研究目的 に関してはルーズビハーン以外の「イラン的」と目されたスーフィーのうち、イブン・アラビー思想との関わりに関し 重要と考えられる文献として、アッタールやルーミーの著作を精読した。特にルーミーの『精神的マスナヴィー』に関してはこれまでとは異なり教団、及び教団教義との関わりから、「悪魔」について中心的に検討を行った。この研究成果は現在英語論文として海外の雑誌に投稿中である。また に関し、メウレヴィー教団の教団教義とルーミー思想との関係性についてスルタン・ワラドの著作を通し検討を行った。特に今年度の研究結果として、従来のスーフィズム思想が教団員に対する理解のしやすさのために画一化されていく様子に関し論文中で指摘を行った。研究成果は『イスラム思想研究』第 2 号、「スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』序文，第 1 章及び第 2 章翻訳」2020 年 4 月、及び、『イスラム思想研究』第 3 号、「スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』第 3 章翻訳」（印刷中）で公開されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kie Inoue	4. 巻 36 (2)
2. 論文標題 Ruzbihan Baqli 's Mystical Thought (Doctoral Theses in Middle East Studies 中東研究博士論文要旨)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本中東学会年報	6. 最初と最後の頁 229 - 233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 井上 貴恵
2. 発表標題 「陶酔系スーフィーとその倫理性 シyamセ・タブリーズを中心に」
3. 学会等名 日本オリエント学会第61回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------